

変わりゆくサウジ社会



拓殖大学 海外事情研究所 助教 野村 明史

2019年9月、私はサウジアラビアの首都リヤドを訪問した。飛行機から降り、しばらく道なりに進むと係りの男性から丁寧に新規入国と再入国のゲートを案内され、入国審査所へと向かった。入国審査所では、5人ほどの審査官が対応していた。中には女性の審査官もいて、男性入国者に対応し、隣の男性審査官と気さくに会話をする者もいた。無事に入国審査を通過して、空港出口へ向かうと、4、5人ほどのサウジ人と思われる女性のグループを見かけた。全員ヒジャーブをまといおらず、その姿をだれも気に留めている様子ではなかった。正直、驚きを隠せなかった。私は2007年から2015年までの約8年間リヤドで留学生活を送っていたが、当時、公の場でそのような場面に遭遇することはほぼなかった。

サウジでは、女性のヒジャーブの着用や男女の隔離は宗教的義務として、徹底されていた。2010年代前半まで、リヤドの大きなショッピングモールでは宗教警察が10人ほどのグループを作って取り締まりをしていた。宗教警察の正式名称は勸善懲悪委員会といい、現地では「ハイアー」や「ムタッワー」といった名前と呼ばれている。彼らは宗教的な義務の徹底や社会的風紀の是正を主な仕事とし、町中でアザーンと呼ばれる礼拝の時間を知らせる呼びかけが流れると、モスクへ向かうように人々を誘導し、街中で奇抜な格好をしている者を見かけると注意を促していた。私の知り合いもツープロックの髪形が風紀を乱すとして帽子をかぶるよう宗教警察から注意を受けたことがあった。宗教警察の中には、自分たちは正しいことをしているという正義感から高圧的な態度をとる者もいて、相手への思いやりや欠けた対応は国民から大きな反感を買っていた。

当時、ショッピングモールなどでは若い男女が、密会の嫌疑でしばしば宗教警察に連行されることがあった。サウジでは婚姻前に血縁関係にない男女が一定の親族の同伴なく会うことは宗教的に禁忌とされている。疑わしい男女の密会があった場合は、宗教警察に通報する者もいて、当時のサウジには一種の暗黙のルールと緊張感が漂っていた。私も飛行機を利用する際に、隣の席に女性客が座っていたら、トラブルを避けるため男性と横並びになるよう客室乗務員にお願いしていた。他の男性客も同じような場面に遭遇すると、席を変えてもらうことは珍しいことではなかった。それは一種の相手への配慮として考えられ、こちらがお願いしなくても客室乗務員が進んでそのように取り仕切ることも多かった。



リヤドモール内の遊技場（2019年9月に筆者撮影）

留学中のある日、サウジの友人とリヤド郊外の砂漠へキャンプに出かけた。私は、真っ赤に染まった夕日を背景に雄大な砂漠の景色を写真に収めようとカメラを手にしたが、友人は私の手をつかんで、カメラを下すよう強く制止した。なぜかと問いただすと、その右側の数百メートル先に女性を伴った家族連れがシートを引いて座っていたからだった。正直、彼らにカメラを向けているわけではなかったし、目を凝らしてようやく見える距離だったので大丈夫だと思っていた。だが、彼らの風貌から私にはわからない何かを感じたのだろう。私は素直に彼の忠告を受け入れた。私のように日本という環境で生まれ育った人間が、一概に他国のルールを簡単に判断、理解することの難しさを改めて痛感した。

そもそも男女隔離の方針はイスラーム教の教えに基づいたものだった。イスラーム教が始まった頃のアラビア半島は、砂漠の厳しい環境下で、男性が主導権を握ることが多く、女性の地位は極めて低かった。こうした背景から、男女隔離の方針は、本来、女性を大切に扱うことを目的として始まった。日本でいう女性専用車両と同じ発想だった。だが、こうした方針は男性主導の社会が大きく影響して、本来の目的からかけ離れ始めた。宗教的意義をよく理解していない者は、女性をコントロールする方法と考え、女性の外出や渡航の自由を制限するなどさまざまな社会的な問題も生み出した。

ただ、女性の不自由さが伝えられる一方で、こうした方針は男性にも大きな負担を与えていた。サウジは1年を通してそのほとんどが40度を超える厳しい気候のため、徒歩で様々な場所へ出かけるのは非常に難しく、国民の多くは車を利用している。また、男女の接触を避けるため公共交通機関の利用も敬遠されてきた。さらに、女性への過剰なまでの保護という観点から、宗教的に禁止されているわけではないのに女性の運転も長く認められていなかった。そうした中、子供の学校の送り迎えや買い物など、家族の移動の多くは男性親族が担っていた。私も友人から突然、子供の学校の送り迎えや母親を病院へ連れていかなければならなくなったので、約束の時間を遅らせてほしいと頼まれることもしばし

ばあった。また歓談を楽しんだ帰りには、スーパーに寄って日用品や食材を買い物して帰る友人もいた。スーパーではメモを片手にカートを押す男性もよく見かけた。私は友人に出勤前や仕事後に家族の送迎や買い物など正直大変ではないかと尋ねたことがあったが、彼は家族の面倒を見ることは誇りだと私の問いを一蹴した。だが、私の目には大変だなど思える場面も多かった。

2018年6月、サウジでも、ようやく女性の運転が解禁され、2016年より立ち上げた改革によって社会の開放が進んでいる。2019年、私がサウジを訪問した際、リヤドモールではヒジャーブを外した若い女性のグループが普通に買い物を楽しんでいる、サウジ社会の変化を肌で感じた。レストランでは、女性のホールスタッフが注文をとり、以前の徹底した男女隔離の様子は消えていた。レストランでは、隣の女性からどこの国から来たのか話しかけられることもあったが周囲の目が気になって落ちつかなかった。2015年までにいたサウジの記憶がまだ抜け切れていなかったからだ。

娯楽面でも総合娯楽庁が中心となって海外からの著名なミュージシャンを招致してコンサートを開くなどエンターテインメントの充実に力を入れている。2018年、それまで禁止されていた女性のスタジアム観戦が許可された。同国で長く閉鎖されていた映画館は2018年にリヤドでオープンし、男女の同席が許された。2019年8月、21歳以上の女性に対し、男性後見人（夫や父親をはじめとする男性親族）の許可を得ることなくパスポートを取得し国外旅行をすることが認められ、12月には、レストランやカフェに男女別の入り口の設置義務も廃止された。

約3,400万を超えるサウジ人口の半分以上は30歳未満である。人口の大半が若年層のサウジはこうした環境の変化を柔軟に受け入れ歓迎しているようだ。ただ、かつて同じように若い頃、社会の開放を望んでいたであろう子供を持つ親世代は、自分の子供の身を案じて急な社会の変化に一抹の不安を抱えている。すべてのサウジ人がこうした変化を理解し、受け入れているわけではないのだ。未だ男性と顔を合わせることを望んでいない女性がいることも確かである。社会の開放という報道に気を取られ、日本と同じような感覚で接するとトラブルを引き起こしてしまうこともあるだろう。サウジを訪れる際には今後も注意や配慮が必要である。



リヤドモールの映画館前（2019年9月に筆者撮影）